
風が紡ぐ聖杯戦争

七緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風が紡ぐ聖杯戦争

【Nコード】

N1415Z

【作者名】

七緒

【あらすじ】

里の人々に疎外されていた少女は、任務先で仲間に見放され、身体に封印されていた『化け物』を引きはがされた反動で死んだ……はずだったのに、気が付くと全く見知らぬ世界で1人の少年の双子の姉になっていたのだ……

Prolog(前書き)

新連載です。よろしくお願ひします！

P r o l o g

「……………」

もう…悲鳴を發する氣力すらなかった。

身体が内から引き裂かれるような強烈な痛みが全身を駆け巡っている。

いやだ……またあんなところにいるよ…!

本当に忍になるつもりなの？あんなガキが忍になったら…

お前なんて里の汚点だつてんだよ…!

…この期に及んで……走馬灯として脳裏に浮かぶこといったらそんなことばかりだった。

物心ついたときからこんな感じだった。

先代の里長と愛人との間に生まれたのが私らしい。

……だが、その愛人の一族が里に反旗を翻し……肅清された。
その時に私も殺されるはずだった……が、愛する人の最後の願い『
この子だけは生きさせてあげて』……を聞き入れるために……里に『
居場所』を作るために……先代の里長は私に『七尾』という化け物
を封印した。

お蔭で里には残ることが出来たけど……この有様だ。

里のはずれに一人で住み……少し外に出ると石を投げられ……冷たい見
下した目で私を見てくる。

それが嫌で……見返してやりたくて……来る日も来る日も修行して……
滝隠れ忍になった。

しかも見習い忍者である下忍じゃない。れっきとした一人前の忍者
である中忍だ！それなのに……

里の人たちからの態度は変わらず……というか更にひどくなってい
った。

ここんとこ続いている不況のせいだろうか？

不満のはけ口が全て自分に向いていた。

来る日も来る日も……石を投げられ……腐った卵を投げられ……パン1
つ買うのに任務で得た金の3分の1を使わされ……

任務で一緒になった忍も、『嫌な奴と一緒にになった』という目で見
てきて……危険なところは私にすべて任せて……

そうそう……確かこんな目に合っているのも、一緒に任務していた忍のせいだ。

探索任務で『川の国』を移動中に、黒い衣に赤い雲模様の外套を羽織った男に私達……三人一組のスリーマーセルは襲われたのだ。

最初は三人で応戦していたのだが、圧倒的な力の差と……奴が『私』を狙っているということを知った途端、他の2人は私を狙ってきた。

……まさか仲間……じゃないな……『任務』仲間から裏切られるとは思っていなかった私は、あっという間に動けなくなった。

外套の男が私を連れ去る時に……一瞬……『任務』仲間の顔が笑っていたのを見た。

そして……奴らは私が見ているのに気が付くと、笑いながらこう言ったのだ。

これで厄介払いが出来たぜ！！

お前みたいなの『化け物』が俺たちと同じ『滝隠れ』の額当てをしているのを見るたびに吐き気がしたけど……もうその心配はねえな！！

……って……

……私……何のために生きてたんだろう……？

『認められたい』っていう一心で…その一心で…修行してきたのに

……

皆が心の底から笑い合う輪に…入りたかっただけなのに……

薄れゆく意識の中……急速に浮いていた身体が、支えを失って地面に急降下していくのを感じた。

ドサツ!!

身体が地面にたたきつけられたとき……すでに滝隠れの中忍……であり『七尾』の人柱力…『フウ』の魂は身体に宿っていなかった。

Prolog(後書き)

えつと……主人公は滝隠れの里の忍……であり『七尾』を封印されていた人柱力の『フウ』です。次回からFateの世界が始まります。感想をくださると嬉しいです！

1話 手に入れた平穩

私は今…ぽかぽか暖かい空間でまどろんでいた。
もうここから動きたくない…そう…このままずっとじっと…

「ほら、起きなよ!」

早くしないと学校に遅刻するぞ!」

…うう…なんか物凄く揺すられている…

「やだ…もう少し…あと1分…」

「もうとっくにそのセリフ聞いてから5分経ってるってば!」
急いでよ、俺まで遅刻しちゃうよ!」

「はいはい…って…」

ガバリっと私は起き上がった。

…自分を布団の上から揺すっていたのは7歳くらいの赤毛の少年
…
私が起きたのを見るとホツとしたのもつかの間、また怒った顔にな
った。

「俺は遅刻したくないんだよ!

さっさと着替えて来いよな、風香ねえ!」

そういつと少年が部屋から出て行った……。

……………誰だ？あの子……………？なんかやけに馴れ馴れしかったが……………

「……っつー！頭痛い……………」

頭に来ていた大きなこぶを私はさすった。

それから枕元に落ちていた分厚い本を拾った。

「あ……………きつと寝てる間にコレが棚から落ちて……………私の頭に攻撃してきたのか……………」

……………だからか……………」

私は深いため息をついた。

恐らく寝ている間に落ちてきたこの本が頭を攻撃した衝撃で、『前世』の記憶が蘇ったのだろう。

まったく……………前世の私はろくな人生歩んでなかったみたいだ。思い出さない方が良かった……………世の中の汚い面を知ってしまった気がする……………あ……………でも、自分の身に宿る『変な力』の正体が前世の影響によるものだとということが分かったからいいか……………

ちなみに今の私の名前は『風香』

七歳で性別は前世と同じで女

頭の良さは平均……より少し下のぐくぐく普通の女の子……

ではないな……皆には黙ってるけど、変な力使えるし……

変な力というのは『チャクラ』という『術を発動させるのに必要なエネルギーの源』のようなものと『風を自由自在に操る力』だ。

私の前世は『滝隠れの里』という所に住んでいた正規の忍者『フウ』。

享年は……たしか16・7歳。

……ちなみに死因は、腐れ親父が私の体に封印した『七尾』というカブトムシみたいな『化け物』を引きはがした反動による衰弱死。

……この『化け物』が封印されてなかったら、私の前世も少しはマシだったかもしれないな。

七尾が私にくれたことと言ったら……『風を自由自在に操る能力』くらいだもん。

それと引き換えに里の奴らから『疫病神』みたいに扱われて……

しかも、この力が今生の私にも引き継がれているのも気に入らない。この力を隠すのが、どれだけ大変だったか……

初めてこの力に気が付いたのは物心ついてから少ししてから。
気が付いたとき、私自身…『自分が化け物』に見えて気持ち悪かつた。

だから、誰にも言っていないし、これからも知られたくない…

みんなから『化け物』扱いされたくない……
前世の記憶がよみがえった今ならなおさらだ。あんな目で見られるのはこりごりだ。

ボタン!!

急に部屋のドアが思いつきり開いた。
見てみると、さっきの少年が怒りで顔を真っ赤にしながら立っていた。

「風香ねええー!!俺まで遅刻させる気かよ!!

さっさと来いよ!!頼むからさあ!!」

「へいへい。分かってるって。」

「分かってない!!とにかく早く来ること!!」

少年はそう言うとりビングに去っていった。

私もすでに着替えを終えていたので後を追う。

……少年は私の双子の弟……『士郎』。

『今の私と同じ赤毛の持ち主だ。
あ…でも、目の色が違うな…』

私は前世と同じ、オレンジっぽい色の目だけど、太郎の奴は金色っぽいを色してる。

日本人か？と疑いたくなるけど私も太郎も日本人の両親から生まれた生粋の日本人だ。

…ちなみに母親と父親は、すでに仕事に出てしまっている。
だからリビングには太郎しかない。

「ふあ……つたく……私なんて置いて先いけばよかったのに……」

そう言いながらパンを食べ始めた。

本当はマーガリンとか蜂蜜をつけたいが…時間がもう7時50分…
あまり余裕がない時間だ。

太郎がむすつとした顔をして私の前に座った。

「母さんが『物騒だから一緒に登校しなさい』って言ってたじゃん。

「あ………そういやそうか…」

最近、私達が住んでいる冬木市では殺人事件がやけに多い。

親が心配してくれるのも当然かもな…

でも……心配してくれる親がいてよかった……って思う。私には…

前世の私にはそんな人いなかったから…

「なにニヤついてんだよ？」

どうやら、顔に出ているらしい……なんか恥ずかしい…
私はゴホンッと咳払いをして立ち上がった。

「…別に何でもないって。ほら、歯磨きしたら行くから待ってて。」

「え…早!!もう食べ終わったの？」

「『忍たるもの、食事は敏速に』だからな。」

「……いつの間に風香は忍者になっただよ……」

呆れた感じでつぶやく土郎……それに私は答えなかった。

ただ……今、ここで平穏な毎日を暮せることが……前世の記憶がよ
みがえった今…無性につれしくてたまらなかった。

1話 手に入れた平穩（後書き）

この頃は第四次聖杯戦争が始まる数日前くらいです。

『フウ』は『風香』として、『後の（衛宮士郎）の双子の姉として
転生しました。

それにしても……士郎の『衛宮』の前の名字ってなんだっただら
う？

2話 親には内緒で…

…PM5時…

そこは女の戦場になっていたと言っているだろうか。
緊迫した雰囲気立ち込めていた。

両者はにらみ合い…火花を散らしていた。

「たああああ!!!」

「負けるかアああ!!!」

ボタン

「……風香く？もう4時だし、帰る支度してもらいなさい。」

部屋のドアを開けて、家に入ってきた母親が、絶頂にあつた2人に水を差した。

「え…もうそんな時間？」

「隙あり!!!」

母親の言葉に反応して、ちらつと私が時計を見た。その隙について、優実**は**必殺技を繰り出してきた。

「え……ちょー！！なんかHPが1に……！！死守しないと！！」

「隙を見せるのが悪いのよ。」

「とうか死守できるものならしてみなさい！！」

「ああああ！！私の女魔術師が……！！！」
メイガス

鼻で笑う優実……私は口を膨らませた。

クソ……片目で時計を確認しておけばよかった……せめて片目でも画面を向いていたら、避けられたかもしれなかったのに……悔しい思いが胸にたまった。

私は数少ない友人の1人……花里 優実と一緒に対戦ゲームに熱を上げていた。

前世は皆無だったが……今は友達と言える存在が何人かいる。

とはいっても……あまり友達つきあいが上手くないせいで、あまりいないのだが……

「6勝5敗……まあまあの結果ね……」

「……はあ……負けた……」

あゝ……！あと一戦やってたら逆転の可能性があったのに……！！」

「仕方ないよ。なんか最近怖い事件が多いし……早く帰らないといけないからね。」

優実が残念そうに言った。

本当に最近『殺し』が多い……

別に死体は（前世で）見慣れているし、自分自身も（前世で）殺しをしたことあるし……

そこまで『殺し』というキーワードに恐怖心はわいてこない。

っというか、元・忍者である私にかなう殺人鬼がいるとは思えない。だから私は別に最近起こっている事件について気にしてなかった。

が、そうではない母親は何かと気にしていた。

『登下校は出来る限り士郎と一緒にすること』『友達と遊ぶのは4時まで』『鍵は必ず閉めること』『知らない人が来ても開けないこと』『……などなど……』

分かり切ったことを何度も繰り返して言うてくる。

士郎はうんざりしてたし、私自身うんざりするが……

でも、今はそれさえも『幸せ』だと感じてしまう自分がある。

だって……それは気にかけてくれている証拠だから……

前世の私には、その言葉をかけてくれる人はいなかったから……

……いや……一応いたな……

だがそれは、『私を心配して』駆けてくれた言葉ではなく……
『アレしちやいけない』『ココには入ってはいけない』『任務がな
い日の夜間行動はいけない』といった感じで『皆が嫌がるからやる
な!』といったたぐいのものだった。

「あ…そうだ!!」

お母さん!明日さあ、学校休みだからデパートに行つていい?」

夕食を食べ終え皿を下げながら母親に尋ねると、驚いた顔をされた。

「なんでさ?」

案の定、まだ肉じゃがを食べていた土郎が不思議そうにこつちを見
てきた。

『風香ねえがなんでデパートに？服装なんて興味ないはずなのに……』
って思ったんだらうな……

「優実ちゃんと約束してるんだ。

一緒にデパートの屋上でやる『ファンタズムーン』のショーを見に行くんだ!!」

「……意外だな……風香ねえって美少女ヒーローものって見てたっけ？」

「（無視）ねえねえ!!」

お母さん~~~~いいでしょ~~~~?」

「そう……まあ……優実ちゃんと一緒だったら平気かしら……

まあ……門限は守るのよ。」

よっしやー!!!

母親からのOKでたー!!!

……いや……事実は曲げてるけど、嘘ばかりじゃないよ……

元々……優実を誘おうとは思ってたし……（用事があるみたいで断られたけど……）

デパートの屋上でショーがあるのは事実だし……

でも……一番の目的は……

デパートで、1ヶ月に一度先着限定発売されるという『季節限定・特製柚子味バームクーヘン』を買いに行くためだ!!!

この日のために、コツコツお小遣いをため……欲しいゲームも我慢し……本も我慢したのだ!!!

絶対に手に入れてやる!!!

待ってるよ!!!バームクーヘン!!!

「……風香ねえ……絶対になんか別の用事が……」

「土郎?何か言った?」

「な……何も言っていないよ!!!ごちそうさま!!!」

……うん……物凄い笑顔を向けたら黙っててくれた。
さすが私の弟よ……

お土産で何か買ってきてあげようかな

その日は明日のことを夢見て幸せな気持ちで眠りについた……

2話 親には内緒で…（後書き）

前世で甘いモノをほとんど食べられなかった反動で、風香は甘いモノが大好き設定です。

花里優実はおリキャラです。風香と士郎の幼馴染で近所に住んでいるという設定です。

次回から原作（Zero）に少しかかわっていく予定です。

3話 白い貴婦人と漆黒の執事

「……くそ……」

まさかこのタイミングで目覚まし時計が壊れるとは思ってもいなか
った……

私は全力で走り続けていた。

こんな時にチャクラを使うことが出来たら……楽なんだけど、昏間
つから使う気にはならない。

昨夜こつそり家を抜け出してチャクラを練ってみたのだが……本当
にチャクラって凄いい！！

前世の時は物心ついたときから使ってたから何にも感慨がなかった
けどさ、こつとして改めて……転生してから初めて使ってみると、世
界が別世界に見えるてくる。

眼下を走る車よりも早く……普通に走るより身体も軽やかに動いて
くれていた。

いや〜〜気持ちいい……風と一体になった気分だ！！

なんか記憶の中にある他の術も使ってみたくなってきた。

きつと……それらも改めて使ってみると、以前とは別物のように感じ
ることができるのだろう。

……ただ……同時に心の中に冷たいモノが走ったのは事実だ。

…この力ってバレた瞬間に人生転落街道真っ逆さまだよな…

前世の時みたいに『化け物！』っと言われ…いや…それだけじゃないな…

どこか病院みたいなところに連れていかれて、毎日…研究されるだろうな…

なんとというか…『新種の動物』とか『宇宙人』のノリで扱われそうだ。

となったら今までの平穏な生活は崩れてしまう…

私だけじゃない…母親や父親…それに士郎だって、今までと同じ生活を送ることができないだろう。

…でも待てよ…？

もしかしたら…私を研究者に差し出した報酬で、今より何十倍もいい生活を送ってたりして…

…考えない様にしよう…

今はとにかく『バームクーヘン』だ！！！！

待ってるよ！バームクーヘン！！！！絶対手に入れてやるからな！！！！

私は力を振り絞ってラストスパートに入った。

「みんなあゝゝ！！大きな声でファンタズムーンを応援して！！
せゝゝの、頑張れ！！！！！」

「「「がんばれ！！！！！」「「「」

「「……………」

なんでこうなってるんだ？

何でもともと見る予定もなかった美少女バトルモノのショーを見る
羽目になってるんだ？

うん…分かってるよ……理由くらい分かってるさ……

そもそも、私がバームクーヘンを買うのに、タッチの差で合わな
かったのが原因だ。

…そして今…隣にいる女性…最後のをタツチの差で買った女性が…
気の毒に思ったのか『タダで』譲ってくれたのだ!!

で、まあ…確かに嬉しかったけど…人のモノをタダで貰ってしまったので、なんか嬉しさよりも罪悪感の方が勝ってしまい…

「なにかお礼をさせてください!!」

つて言っただよ…いや…最初は断られたんだけど、何度もお願いしたら…

「この町の観光スポットを教えて欲しい」

つて…でもさ、開発途中のこの町に、あまりめぼしい所なんてないし…

つてか、私自身…精神年齢はもっと上だが肉体年齢は7歳……
ここで新都の事に詳しいわけでない。

で、仕方ないので…ココ…デパートの屋上の仮設ステージに来たわけだ。

…チラリ…と私が連れてきた2人組を横目で見ると…

「がんばれー！ー！ー！ほらほら、セイバーも応援しなさいー！
風香ちゃんも遠慮しないでいいのよ。」

私にバームクーヘンを恵んでくれた女性……アイリスフィールさん
って人が、物凄い夢中になって応援をしている。
…オタクだったのだろうか？そうは見えないんだけどな……
きつと……こういうのが珍しいから興奮してるのかもな。

彼女は全体的に白っぽい格好をしていて、ロシアとか北方系を思わ
す帽子をかぶっていた。

ちなみに目は赤い。これは充血しているのではなく、もともと真紅
の色をしているのだそうだ。

「…アイリスフィール…私には騎士としての誇りがあります。
たとえば貴女の命令であっても……その……」

で、こっちで応援するのを躊躇っているのが、セイバーさん。

アイリスフィールさんの執事みたいな感じで、彼女と対照的な黒で
身を固めている。

……まあ…燕尾服だから黒なのは当たり前か……

ちなみに名前に分かるように、彼女も外人さんで、長い金髪に緑
色の目が特徴的だ。

「いいじゃない！

こういつた機会って、これからは滅多にないわよ……！

「……はあ……」

ごめん…セイバーさん……なんかため息つかせちゃって…

「楽しかったわね！！イリヤにも見せてあげたいわ。」

「イリヤ？」

「ええ…風香ちゃんと同じくらいの私の娘よ。」

その時…なんでだろうか？アイリスフィールさんは笑顔だったけど……一瞬だけ、影が差したのを見た気がした。

なんか……もう会えない人を思い返すような……懐かしさと寂しさが入り混じった……そんな顔を一瞬…無意識のうちに見せていた。

…きっと何か事情があるのだろうか、詮索はしない方がいいな…

「そうだ！風香ちゃんは何時まで大丈夫なの？」

「え……？えつと……門限は4時だから余裕をもつて3時には帰りたいです。」

「そう…それならまだ数時間あるわね…

それまで一緒に回らない？」

「アイリスフィール！！」

このような時に子供を連れて散策など……！！」

セイバーさんが怒った感じで言った……ってか怒ってるよね。

でも、そんなセイバーさんなんか素知らぬ顔のアイリスフィールさん。

「平気よ。だいたいサーヴァントの気配はないんでしょ？」
「サーヴァント？」

聞き覚えのない単語だな……なんだろうか？

「えつとね……実はSPがいるんだけど……
煩いから撒いてきちゃったのよ。」

嘘だ……この人は何か隠してる表情をしてる……

でも……ツツコまないようにした。
だってさ、ツツコまれたくないから嘘ついたんでしょ？なら聞かない方がいい。

「アイリスフィールさんって凄いね!!」
SPを撒くなんてカッコイイ!! 映画のヒロインみたい!!」
「褒めてくれてありがとう。」
「はあ……仕方ありませんね……」
「貴女がこの子どもと周ることを望むのであれば、私は従いましょう。」

一応、セイバーさんからのOKも出たみたいだ。

「行くわよ、風香ちゃんにセイバー!!」

嬉しそうに笑う彼女……。今がとっても『幸せ』って感じの笑顔だ。
…なんでかな？

前世の私が…初めて里の外に出ることを許してもらえて、初めて外
の里で買い物しているときの笑顔に似てる気がする……

気のせいかな？

もうそのことは考えない様にしよう。

で、楽しい時間ってあっという間に過ぎるモノで……もう3時だから、彼女たちとは別れて、帰路に着こうとしたのだが……

「!？」
「!？」

そのとき、何かが私の近くを通り過ぎた感じがした。

姿は見えないけど……好戦的な何かが……

私はそっと目を閉じた。

…もう『七尾』は封印されてないけど、七尾の力は使えた。

その中の一つ……封印されていた時よりも能力も格段に落ちるが…

…『探査』を本格的に使うためのチャクラを練り上げる。

…これは周囲の『異能の力』を確認するための能力だ。

…っていつても……前世の記憶を思い出すまで知らなかった力だし、
思い出しても使うなんて思ってもいなかった。

一応…常時発動している能力…なのだが、『異能の力』なんて、そ
んなほいほいあるモノではないし、だいたい七尾が封印されてない
今は、この能力自体がかなり落ちているので、『相手が隠そうとし
ている場合』だと反応しないのだ。

だが……これに引っかけたということは……
その力を、私の横を通った何かは隠そうとしていない……ということ
だ。

…目をつむっていると……目を開けていた時よりもずっと多くの情
報が脳内に入ってくる。

……人が行き来する雑踏……その中で一際目立つ好戦的な存在の姿が

見えた。

なんか……黒髪の青年で槍を持つてる……この時代に槍？ってか……

もう一度目を開けて、その位置を見るが……そんな青年はどこにもいない……

ただ……まだ発動したままの『探査』が、『そこに青年がいる』という情報が脳内に送られ続けていた。

……忍者……かな？私と同じような……

私は路地に入ると印を結んだ。

「影分身の術！」

ポワんっという煙と共に、少しも違いがない私が現れた。

「さっきの男を、気が付かれないように追ってくれる？」

「了解。」

影分身の私はニッと笑うと、すぐに雑踏の中に紛れてしまった。

「……なんなんだろうな……」

まあ……槍男ことは影分身あれにまかせるとして、私は帰るとしますか。

……蜜色に染まりつつあるこの町で……これから繰り広げられる戦いに片足を踏み入れかけていることに、この時はまだ気が付かなかった……。

4話 倉庫街の死闘（前書き）

今回はちょっと長めです。

4話 倉庫街の死闘

「……………なんなんだよ……………あれ……………」

私はボソ…^{ぶんしん}つつぶやいたが、幸いここは風下なので、今の声は、
どんちゃん騒ぎをしてる奴らには届いてないだろう。

……………先程私の追っていた透明な男は、港の倉庫街に着くと実体化した。
やはり意図的にすがたを隠していたようだ。

……………たしか……………前世では『岩隠れの里』に透明になれる忍者がいた
と聞いたことがあったが……………
その亜種系統の術だろうか？
だがわからない……………忍びが槍を主体の武器として使うのだろうか？

……………そうこう考えているうちに、現れたのは、昼間一緒に行動した
……………緊張して張りつめた顔をしているアイリスフィールさんとセイバ
ーさん……………

3人は、『サーヴァント』とか『聖杯』とか言い合っていたが……………

そんな専門用語が私にわかるわけもない。

……アイリスフィールさんは人間っぽいけど、セイバーさんと槍使い…ランサーとか名乗ってた人は、なんか人間じゃない…力を持っている事は明らかだ。

とはいっても、私と同じ忍者ではないみたいだが……

そして、セイバーさんが青いドレスの鎧を身にまとったとたん、戦いの火ぶたがきつて落とされたのだ。

それは…幾たびの戦いをくりぬけてきた私でさえ……目を奪われる戦いだっただ。

前世も含め……今までに見たことのない戦いだっただ。

不可視の剣と2本の槍が交差しあつさまは、まるで互いに舞いを踊っているようにも見える。それくらい美しく輝くような戦い……だが、それは見世物ではなく死闘……なのに……なんか二人とも満足した感じの表情を浮かべている。

死闘なのに狂乱の戦いではなく……互いに尊重しあい…認め合った上での一騎打ち……

だからこんなにも美しく輝いていて、引き付けられる戦いになるのだろうか？

少なくとも…前世で経験してきた戦いとは違った。

私の戦いは忍者の戦い…… 尊重なんて考えたこともない。

だって…… 忍者は道具だから……

『戯合いはそこまでだ、ランサー』

突然、オッサンの声が頭に響いた。

誰だ？他にもいるのか？

そう思い周囲を見渡すが…… 視界に入ったのは、コンテナの陰に隠れる小柄な女と…… クレーンの上に乗っている怪しさ満点の仮面男……

…… アイツらの声じゃない…… よな？

仕方ない…… 少しでもチャクラの消費を抑えるために目をつむり『探査』を始める。

すると…… ポールの上に金ぴか鎧の傲慢そうな男が一人…… そしてコ

ンテナの上にナルシストそうな男が一人…たぶんこいつの声なんだろうなって思う……
んで、驚くのはこれからだ。

この2人は姿を消していたから分からなかったのは当然だと思う。
でも…気が付かなかった……もう1人…銃を構えた男がコンテナの陰にいたことに……
術なしで…忍者でもなさそうなのに、ココまで姿を隠せるなんて…
…ちよつと感心してしまった。

少し何するのかな…って見てたけど、銃を構えたまま動かないので…仕方なく『探査』を解き、戦場に目を戻す。

いつの間にか赤い槍一本で戦っているランサーと鎧を脱ぎ捨てたセイバーさん。

……身を軽くした…ってことかな？よく分からないけど……
にしても……危ないことをするな……って思った。

ココからだから分かるのかもしれないが……ランサーの足元には使っていない方の槍が転がっている。

ランサーを攻撃するには彼に接近しなければならぬ。
が、その時に……その隙をついてあの槍で攻撃されたら……

鎧を纏っていないから…防ぐものがない。

案の定、予期していたことが起こった。

わずかに足の運びが鈍り、隙を見せたランサーに弾丸のように攻め入るセイバー。

が、ランサーが転がっていた槍を蹴り上げ…その槍についていた呪符のようなものはがれ…黄色の短槍が剣を振り上げ鎧も纏っていないセイバーの喉元に刃を向けた…！！

が……セイバーさんの腕も大したものだ。

紙一重でそれを交わし…左手を怪我したみたいに見えるが…それでも致命傷は免れたようだ。

しかもその上で、ランサーの腕にもちゃっかり傷を作っていた。

……2人とも傷は浅い…が、ランサーの傷が何故か高速で…ビデオの巻き戻しをするみたいに治癒されていく……

セイバーさんは苦い顔を見るとアイリスフィールさんに向かって叫んだ。

「アイリスフィール！私にも治療を！！」
「もうやっっているわ！！」

見ると、アイリスフィールさんがセイバーさんに向かって両腕を前に出していた。

…いいな…遠距離からの治療能力か…
前世の世界では近づかないと出来なかったから…前世の世界の医療忍者たちが見たら、羨ましがらるだろうな…

って…そんなことはどうでもいい！！

どうやら…あの黄色の槍は『消して癒さない傷』を作るらしい…
厄介だな…ホントに…

なんかそれで正体がセイバーさん達にばれたみたいだけど、私は知らない人の名前だった。

『ケルト神話』とか言っていたけど…神話って物語だろ？読んだことないけど…

その時！！突然、雷鳴が響き渡った。

こんな天気がいいのに！！？って思ってた上を見上げると……

…なんかデツかい牛にひかれた戦車が下りてきた。

豪快そうなオツサンと……従者…なのかな？って感じの気弱な少年を乗せていた。

どうやら……新たな敵が登場したわけ…みたいだな……

私は気を引き締め直した。

…張りつめた静寂が訪れた時……豪快なオツサンの声が響きわたった。

「双方武器を収める。王の御前である！

我が名は征服王イスカンドル。このたびはライダーのクラスを得て現界した。」

……静寂……

…皆ポカン…っとしている…

ってかさ…なんであいつ…急に名乗ったんだ？それよりも…声でかいよ……近所迷惑。あ…でもここは倉庫街だから人いないか……

っというよりいたら、さっきまでの戦いを聞きつけて誰か来るよな？

さて……どうやら……彼はセイバーさんとランサーを仲間に加えた
かったみたいだな……

結果……それは相手を逆上させるだけになったみたいだな……
聞いてなかったから分からないが、おそらく利益が一致しなかった
のだろう。

「だからやめとけって言っただろ！」

気弱そうな少年が抗議の声を上げる……もしかして……あっちが主人
でライダーってのが従者なのか？
可哀そうに……あの少年……いろんな意味で前途多難って感じたな……

でも……あの豪快な人の従者みたいな立ち位置にいられるってことは、
才能っていうのはあるのかもな。
だって……いくら豪快な人でも才能ないと従者にはしないよ。
聞く限り正論を述べているしな……

『そうか、よりもよって貴様か』

ランサーの主人の声がまたも響き渡る……

その声を聴いたとき……気弱な少年も震えていたが……私の背中にも寒いモノが走った。

だって……その声色は……こっちに来てからあまり聞かなかった声色……
……
一方的に人を見下す声だった……

なっさけねえな!!

化け物なのにドベだなんて……

お前なんて足手まといなんだよ!!

声が……声が蘇る……

そう……私には才能がない……その上『化け物』持ちだ。
だから……見返してやるためにたくさん修行した。でも……奴らは……私が奴らより強くなっても……認めてくれなかった。

だって……『化け物』だから……
私の実力で『七尾』の力は借りてないのに……それを『化け物の力を借りてるから強い』お前自身は弱い』って決めつけやがって……見下しやがって……!!!

『魔術師どつしが殺しあうというとう本当の意味……その恐怖と

苦痛とを、余すところなく教えてあげるよ、光栄に思いたまえ。』

何が『光栄に思いたまえ』だ!!

偉そうにしてさ!! そんな陰でコソコソ隠れてるエリートさんに『殺し合い』が教えられるかってんだ!!

見るからにアンタ…『本当の殺し合い』したことないだろ!! 私の方がまだそっちの経験値が高いと思うぞ?

あ~~~~なんかイラツとしてきた!! アイツ…ぶん殴りたい!!!! あのナルシスト顔を変形させてあげたい!!!!

「…ここに集うがいい!!」

なおも顔を見せないような臆病者は、征服王イスカンドルの侮蔑を免れぬものと知れ!!」

前半の方は聞きそびれたが…戦場に大気を震わす豪快な声が響き渡った。

それを聞いたとき……私の口元が歪んだ気がした。

……思い立ったら吉日!!

他の人たちに気取られないように……気配を立てて移動する。

戦場の舞台に立っているセイバーさん達は、そっちに夢中で気づかれないと思うから……

注意すべきはクレーンの上の仮面と……小柄な女……

仮装大賞もびつくり！！ってかんじの金色の鎧を纏った人は姿を現したみたいだから……ほおっておいて……

一番気を付けないといけないのは……銃を構えた男……だな。

だが……戦場に『戦いの』騒がしさが戻った今、そっちの方に神経が言っているはずだ。

一旦戦場を離れ、コンテナの裏を周りながら……

……… 構築楽に目的地に着いたとき……… 改めて戦場を見下ろすと……… 結構様変わりしてた。

いつの間にか黄金の鎧の人はいなくなっていて……… 代わりに真っ黒い鎧に同色のオーラを放った人が、セイバーさんを斬りかかっている。

セイバーさんは元々怪我してるからな……… しかも治らないみたいだし………

さて…どのタイミングで実行するか……

…って悩んでいると…ランサーがセイバーを助けに入ったのが見え
た。

セイバーさんは感動したみたいな顔をしている。

どうやら…ランサーは自分とセイバーが戦っていたのに横槍を入
れるな！…みたいなことを言っていた。

…こういう戦いって…初めて見たかも…
戦いにも『尊重』ってあるんだ……なんか感心するな…

『何をしている、ランサー？』

どうやら彼の主は、その行動が理解できなかったみたいだな。

なんというか…『セイバーさんを護るな！…ってかセイバーさんをさ
つさと殺せよ！…』って感じの口調だ。

それに反論するランサー。

いや……反論するときも口調が丁寧だな……凄くなって素直に思
った。

「この私とセイバーとの決着だけは尋常に……！」

『ならぬ。ランサー、バーサーカーを援護してセイバーを……ぐわ

あああ！！」

言葉を言い終える前に、彼はコンテナから落ちて行った。

え？なんで落ちて行ったかって？それはもちろん……

私が蹴とばしたからに決まってるでしょ！？

「まったく……そういう態度は嫌われるぞ……バカ。」

……あゝスッキリした！！！！

……でも……

周囲の視線が痛いのは気のせいかな？

5話 戦場を困惑させる猫

「……………なんなんだ……………あの女の子は……………」

僕……………衛宮切嗣は、突然現れてランサーのマスター……………時計塔の一級講師であるケイネス・アーチボルトを蹴り飛ばしてコンテナから落とした女の子を少しにらんだ。

歳は8歳の1人娘……………イリヤと同じくらいか彼女より下だろう……………か？赤髪でショートカット……………服装も深緑のコートにジーンズといったシンプルな感じで……………全体的にボーイッシュな雰囲気醸し出している少女だ。

一体彼女は何者なのだろうか？いくらセイバーに気を取られていたからとはいえ周囲の状況は把握していたつもりだ。なんであの少女に気が付かなかつたのだろうか……………

まさか……………あれはアサシンの本体か？アサシンなら『気配遮断スキル』あるから気が付かなかつたことにも説明がつくが……………いや……………それはないな。アサシンだったらあんなに派手な真似はしないだろう。

なら姿を隠しているバーサーカーのマスターの主か？

いや……………それなら多少なりとも魔力を感じるはずだ。それなのに……………彼女からは魔力が感じられない。だが、それなのに……………ランサーの『魅了^{チャーム}』にかかっている様子はないし……………

そもそも…なんで姿を隠しているケイネスの位置が分かったの
うか？彼の位置を見破るためにはハイテク機械に頼らなければ
ないのに……彼女がそのようなものを持っているようには見え
ない……

一体何者なのだろうか？しばらく様子見と行くか……

「主！！」

セイバーさんと漆黒の武人の間に立っていたランサーは、コンテナ
からバンジージャンプ中の主を助けるため一気に跳躍し……彼が地
面に激突する直前で助け出していた。

「き……貴様！……いつたい何者だ！……」

「おいおい……部下に助けてもらったのに礼もしないの？」

「私の質問に答えたまえ！」

「……ま……まさか………風香ちゃん！？」

……アイリスフィールさんが驚いてる。そりゃそうだろうな……なんのことはないフツの子供で家にとくに帰ったのだと思ってた子が、姿を隠しているはずのオツサンを蹴り飛ばしたのだから……。

……ん？まてよ………これって不味くないか？

思わず感情のままに動いてしまったけど………こんな戦い………確実に『一般人』は見てはいけない戦いだろ？夜中に人気のない倉庫街で殺し合ってるなんて常識じゃ考えられない。……このままだと『目撃者は全員殺す』………みたいな感じになるんじゃないか？

いや………私は殺しても影分身だから意味ないけど………今後の生活に支障有りすぎだろ………！！

………私自身は何とかなるかもしれないけど、何も知らないし能力もない両親や士郎が危なすぎだろ………！！

………つたく………仕方ない………なんとかしてごまかさないと………

「……フフフ………昼間はありがとう………アイリスフィールよ。」

めんどくさいけど、速攻でキャラ作るぞ………くそ………なんでアイツ

蹴ったんだよ、私！！いや……ムカついたけどさ押さえないとダメだろ……やるとしても穏便にやらないと……これはあれかな？『肉体年齢に引きずられる！』って感じの奴かな？

「……適当に町をふらついていた女の子の姿をコピーしたのだが……結構便利だな、幼女の姿というものは。」

「では……その姿は本来の姿ではない……ということか？」

うわ……怖いな……ランサーの奴がめっちゃくっちゃん睨んできてるよ……

「まあな。ちなみに『風香』って名前も偽名……だな。

で……私が何者かって？オッサン……アンタが先に名乗りなよ。女性に先に名乗らせるのか？」

「オッサン……だと！？何を言うか、私はまだそこまで年を取ってない。

ウェイバー君……何を笑っているのかね？」

ピシッとウェイバー……つまりライダーの従者に見える主の少年に向かって指差した。

あ……本当だ……笑いをこらえてる……でも、いきなり怒鳴られてビクッて来たみたいだな。ぴたって笑いが止まったぞ。

……で、それを見て少し満足したらしいオッサンは視線を私に戻した。

「もう一度問う……お前は何者だ？」

「……フフフ……いいだろう……教えてあげようか……」

子供の姿に身を隠し……えっと……十数年……風の日も……雨の日も……雪の日も……晴天の日も……曇りの日も……アニメの再放送が待ちきれない日も……」

「……いいから早く言いやがれ……!」「……!」

「……うち……うるさいな……皆で声をそろえなくても、分かってるよ!でもさ……思いつかなくて困ってんだよ!……少しくらい考えさせる時間をくれたっていいだろ!?!……でもそんなこと言えないし……仕方ない……このキャラで行くか……」

「まあ焦るでない……とにかく私の正体は……!……!」

『変化の術』の印を結ぶ私。そろそろチャクラがアレになり始めるけど……この程度の術なら何とかなる!

ポワ~~~~ン

……つて音と白い煙……そして私が変身した姿は……

「『ネコアルク』とは私の事だ……にゃあ……!」

……シーンと静まり返っちゃったよ……

でも仕方ないだろ……思いついたのがこれしかなかったんだし……

えっと……ちなみに私は『ファンタズムーン』に登場するマスコットキャラ……『ネコアルク』に変化しています。具体的に言うと……眼が大きいのが特徴的な、50?くらいの金髪のネコです。あ……ちやんと服着てますよ。

どうせ知っている人なんていないだろ？いや……アイリスフィールさんとセイバーさんは昼間のショーで見るから知ってるか……いや……『ネコアルク』は、あのショーには登場してなかった！時間系列的にまだ登場してないころの話のショーにしてたから2人は知らないはず！！

「……………ネコ？」

「違う！『ネコアルク』だにゃあ！！！」

「……………なるほど……ネコだから、ランサーの『魅了』^{チャーム}に対抗できたのか……………」

「『魅了』^{チャーム}？なんだそれ？」

呆然とした感じのウェイバーって名前の少年に尋ねてみる。
すると彼は戸惑いながらも答えてくれた。

「え……っと……彼の頬にホクロがあるだろ？アレを見た魔術師ではない女性みんな、虜になってしまっただ。ただ……女魔術師^{メイガス}と言

「……でも対魔力がないと虜になっちゃうみたい……って、なんで僕が説明しないといけないんだ!!!」

「別にいいじゃん……そっか……魔術か……」

……ふん……そんな能力があつたんだ……

「奴らは『ネコだから効かない』って思ってるみたいだけど、私は人間で魔術師でもないのだから……その能力は効くはずなのに、効いていない……っとなると考えられることは1つ！」

『魔術 忍術』

「……ってことかもな。『忍術』が使えるってこと以外は、そこら辺の7歳児と大差ないんだし……」

「……何故、我が主を蹴り飛ばした？」

「あ……あれ？なんかランサーの周囲の空気が変わったぞ？めっちゃくっっちゃビリビリしてる……」

「……なんで我が主を蹴り飛ばしたのだ？」

「その子を一方的に馬鹿にしたから……だにゃあ。」

そう言っつて私はウェイバーを指差す。

「だつてさ……彼だつて努力してるのにそれを頭っから否定するのはおかしいだろ？」

ハッキリ言うけどオッサンは確かにさあ、見た目からして頭いいと思う。でもさ……」

「黙れ!!!」

言い終える前……つてか問題点を指摘する前にオッサンは立ち上がって叫んだのだ。

「たく……人が話してるつてのに……」

「ランサー!!命令だ……あの煩いネコの口をふさげ!!!」

「分かりました!」

つと言つた瞬間に地面を蹴るランサー。

あつという間に私との距離が縮まっていく。黄色の槍と赤い槍を持つてこつちにまっすぐ走ってくる。

「不味い!!!」

ランサーが使おうと決めたのは、黄色い槍の方だつたみたいだ。私にまっすぐに襲い掛かるうとする黄色い槍。

私はとっさにチャクラを練り上げ印を結ぶと……大きく息を吸い込

み…そして…

「『水遁・水乱波』!!!」

「!!!」

私は口から大量の水を吹き出した。本来なら敵を押し流すくらいの術なのだが、チャクラとの折り合い上…全力を使えなかったので『押し流す』まではいかない…少し強力な水鉄砲をかけられたみたいな感じになってしまった…が、不意打ちを食らったランサーの動きが一瞬だけ鈍くなる。

その隙について私は一度コンテナを下りて彼との距離を放そうと走り出した。

つてか…まずいな…チャクラが残りわずか…だ。『変化』を継続させるだけで精一杯…どうにかして逃げ出さないと…

「お主…余の軍門に下ってみないか？」

「はい？」

何て言いましたか…この人？

先程大声でいきなり本名を叫んでいた人…ライダーがいつの間にか自分の横にいた。

「先程の魔術は見事であったからな。正確に言えば……魔術とは少し違うみたいだが……そこも魅力的なところだ。どうだ？この征服王と一緒に世界を手にしらないか？」

「断る」

「そうとは言わずにどうだ？待遇は応相談だが……」

「くどいぞ。やらないと言ったらやらない!!」

キツパリと言い放ってやったら、ライダーは大きなため息をついた。それを見計らったように、ランサーが声を上げた。

「ライダー、話はすんだか？済んだのなら戦闘を再開するのだが……」

……

「ん？あ……すまん。」

それよりも……本当にお主は余の軍門に加わらないのか？」

「くどい!!何度も言っているが、俺の主はたった1人のみ!!他の人物の下に着くなど……」

あれ……なんでだろう……さっきまでと全く同じなのに……急にランサーが……変わったような……

なんというのかな……一気に美男子に見えてきた……前世でも見たことがないくらいの妖艶な美貌……

ヤバイ……顔が熱を出した時みたいに熱い!!

心臓が急にバクンバクンなり始めてきたし……なにこれ？こんな時に病気でもしただろうか？

「……!!……かちゃん!!風香ちゃんしっかりしなさい!!」

パシィパシィと軽く頬を叩かれたことで、ハツと我に返る私。隣を見るとアイリスフィールさんが何やら厳しい顔をしている。

「しっかりして！その感情はランサーの能力…『魅了』^{チャーム}によるものよ！

さっきまでは効いてなかったのだから気を確かに持って、風香ちゃん！」

「…私の名はネコアルクなのだが……って……ええ！！私、『魅了』にかかったの！？」

黙ってうなづくアイリスフィールさん……なんてこった……さっきまではなんとも思わなかったのに……やっぱりチャクラの消費が原因だろうか？

ただでさえ半分のチャクラしかないのに『探査』『変化』『水乱波』……3つも術を使ったのだ。もうすぐチャクラは底を尽きようとしていた。

手を見ると……幸いなことにまだネコアルクのまん丸い手のままだ。変化は解けていない……ならまだ何とかなるかもしれない！！
そう思った矢先だった。

「……………aa……………ar……………er……………！！！！」

……こいつの存在すっかり忘れてた!!!

放置プレイに耐えきれなかったのだろう……倉庫街に響き渡るくらい大きな奇声を叫ぶと、鉄パイプを握りしめてセイバーさんに向かって走り出したのだ!

セイバーさんは目の前で起こっていた私に気を取られていたので、慌てて右手で剣を持ち直して迎え撃とうと構えた。

……左腕を封じられ全力を出せないセイバーさんは、非常に不利だ。

「セイバーさん!!!!」

気が付くと、加勢をしようとして残り少ないチャクラを足に集め、地面を蹴る私が出た。

そのまま一瞬で迎え撃とうとするセイバーさんと、鉄パイプを振り上げる武人の間に割り込んで……そして……

案の定、鉄パイプで吹っ飛ばされて……高速で宙を旅させられていた。そのままコンテナに凄い勢いのまま激突し……

ボワン

つと間の抜けた音を立てて……私は消滅した……

「……………っ!!!??」

私はガバリっとなんげ上がった。

脳内に洪水のように急に流れ込んできた大量の経験……………おそろくは…影分身が消滅したのだろうか……………

「風香ねえ?」

横を向くとトイレに起きていたらしい士郎が、眠たげな眼をしながらも……………心配そうにこちらを見てきた。

汗だくだったが…私はにっこり笑って立ち上がる。

「平気。ちょっと怖い夢見ただけだから……ちょっと台所で水飲んでくる。」

おやすみ、士郎

「うん……おやすみ風香ねえ。……ふああ……」

あくびをすると士郎は布団に戻っていった。

私はまっすぐに台所に向かい……ミネラルウォーターをそのままゴクンゴクンと半分くらい飲んでしまった。ミネラルウォーターは喉だけでなく……身体に染みわたっていく気がした。

……色々と情報がありすぎて頭がパンクしそうだった。

いつも飯を食べる椅子に、ふらつくように寄りかかり脳内の情報を整理する。

おそらく……運が良かったら……『ネコアルク』は死んだと思われただろう……。

あの影分身が消えるときの間抜けな音は、コンテナに激突した時に発生した巨大な音にかき消されたと思うからだ。

だが……油断はできない……あのオッサンやウェイバーという少年あたりなら騙せるだろうが……他のメンバーは分からないし、なにより用心しないといけないのは……コンテナの陰に隠れていた中年の男だ。

きつと……『私』^{ネコアルク}が生きていることに気が付くと思つ……

「まったく……面倒なことに巻き込まれたな……」

はあ……っと深いため息をついたとき……消防車のサイレンが深夜の町に響き渡った。

……なんだろうか？っと思いい雨戸をあけてみると……

丁度……火災の影響で赤く染まる階が見えるホテルは……巨大な爆音を響かせ電気が全て切れ夜の闇に溶け込んだかと思うと、一気に粉々に崩れ落ちたのだった……。

6話 決別

頬杖をついて黒板を眺めていたが、何にも頭に入っていない。
私の脳内の大半は、深夜の出来事が絞めていた。

本来ならば学校に来るのは得策ではない……まだ自分の生存を疑っている奴がいるかもしれないからだ。

でも……休むのはいけない……このタイミングで休んだら……もし……このクラス内に倉庫街にいた人間の関係者がいた場合……疑いが強まるからだ。

……一応……『変化の術』で『私は風香ではない』とアピールはしたが……成り代わりを疑われているかもしれない。ランサーの主人であるオツサンやウェイバーっていう気弱な少年……たぶんアイリスフィールさんは疑ってないと思うが……たぶん……あのコンテナの陰に隠れていた男は疑っていると思う。

クレーンの上にはいた仮面野郎は除くと……彼が一番……前世の私が接してきた忍者に近い気がした。しかも……死線を潜り抜けてきた歴戦の暗殺部隊の上忍の気配がしたのだ。

感情を押し殺して……殺人のための道具として動いている……直感だからアテにならないかもしれないが、そんな感じがした。

だから……もし忍者的発想で考えると……きっと街中で『私』を見かけたら、念を入れて殺してくるかもしれない……後難は取り除いておかないと目的に達成できない可能性が出てくるからだ。

そう考えると身体の底からブルって震える。

それでも、たぶん大丈夫だ……っていう楽観的な希望を捨てないよう
にしていた……けど……冬特有の乾燥した身まで凍えるような
空気が顔に刺さる中……ホテルが崩れていったのを見たとき……
何かが私の中で崩れていった気がした。

……あの倉庫街の戦いを見た後だから……かもしれないけど、あの死
闘とホテルの破壊は関係ないとは思えなかった。

私が首を突っ込んでしまった世界は……楽観的に考えていい世界で
はないと悟った。それと同時に、今までの自分を……一時でもいい
……せめて一連の騒動が収まるまで……この七年間生きてきた自分
を捨てようと決心した。

映画感覚で感じていた『前世』の自分……『フウ』に戻ろうと決心
した。

周囲に気取られないように『風香』にもなるけど、基本的には『フ
ウ』になるうって思った。

七年間の楽観的でバカな自分より……馬鹿は馬鹿でも中忍として経
験を積んできた自分の方にしないと、この騒動に首を突っ込んでし
まったからには生き残れない……。

せっかく手に入れた平穩が自分の手で崩してしまった……って考え
ると苦笑がこみあげてくる。

せっかく『化け物』って言われる生活からおさらばしたと思ったの

に……馬鹿だな……

……風香ねえは最近ちょっとおかしい……

俺から見た双子の姉：風香ねえは、明るくてドベで挑発に乗りやすい馬鹿だった。……なんか悪口みたいだけど、本当にそんな感じだし、それが風香ねえなのだから仕方ない。

でも……数日前から風香ねえは、ただ明るいただけではなくなった。

たまに……なんていうのかな？大人って感じの表情を浮かべるときがでてきたのだ。
なんでだろうか……って思ってたら、今朝になって更に大きな変化が起こった。

いつも通り明るくて馬鹿をやって……算数の問題で間違えてアハハ
〜って笑っているけど……

ふと見ると、顔に表情がないのだ。

いつもの風香ねえを知る人なら驚愕するくらい怖い感じの無表情……
…何にも感じていないような……深い闇を抱えているような……そんな感じの表情だ。

ちなみにこの事実気が付いているのは俺だけだ。

仕事が休みで朝ご飯と一緒に食べた母さんは気が付かなかったし、
担任の先生も気が付いていない。

幼馴染の優実ですら気が付いていないのだ。

ここまでみんな気が付いていないとなると、俺がおかしくなったのかも
もしれない……

「……………う！……………土郎！！」

バシィッと頭を急に叩かれたので、俺は痛みで机に伏してしまった。

「痛いじゃないか！……って風香ねえ！！」

「ったく……返事は早くしなさいよ！！」

「……どうしたの？」

「ん？……ほら、じゃっじゃじゃーん！！」

そう言っ得意げに何かを俺に見せてきた風香ねえ。

見てみると……

「……77点？」

さっきの時間にかえされた算数のテストだった。

「そう！ラッキーセブンでいいでしょ！！」

「ラッキーセブンは777だよ？っというか……今回のテストって80点以上が合格なんじゃ……」

「細かいことは気にしないってことよ！

だいたい算数が日常生活の何に役に立つって言うの？平均60点の私からしてみたら、この点数はもう最高って感じなの。しかもこんな運命的な数字って……あゝなんかいいことありそう！！！！」

めっちゃくつちゃ喜んでる風香ねえ……うん……やっぱり俺の勘違い……かもな……

でも……一卵性でなくても俺たちは双子だからかな？……なんとなく風香ねえが無理している気がしてならなかった。

「おっ！！ラッキーセブンの一歩手前ジャン！！」

乱入してきたのは優実だった。……ちなみに、さっき見せてもらっていたけど優実の点数は83点っていう微妙な数字だった。

「あゝ……何って言うのかな？ちよつと優実に負けて悔しいかも……でも、ゲームでは優実より強いからいいか！！」

「何言ってるの？この間私に負けた分際で……」

「負けてない！！アレはただ……そう！！手が滑っただけだ！！」

「へえゝ……6回も手が滑ったんだ。」

「うう……そ……そもそもだな！！土郎は何点だったんだ？」

……話題変えたな……風香ねえ……黙ってテストを見せる。

「へえゝ……つてすご！！98点かよ？」

「意外に土郎って凄いな……姉とは違つて。」

「おい！！もう一回言ってみなよ！何て言ったの？」

「（無視）……それより……最近物騒ジャン？それについてなんだけど……今日さ、午前中授業だから一緒に真相を確かめない？」

突然、優実が提案をしてきた。

「ほら、昨日もホテル爆発あったし、殺人事件も多いでしょ？」

だから私達で解決してみない？」

優実の目がやけに真剣だった。

……優実の両親は刑事さんだ。だから……連日して事件が続いたりしているとな親の力になりたいのか、今回みたいな提案を唐突にしてくる。……きっと今回も親の役に立ちたいのだろう……。

でも、いつも捜査の役にたてることはないんだけど……優実の気休めにはなると思って……あと、俺たちも『捜査』ってなんか楽しいし協力しているのだ。

「やめな。」

だから……低いけど……でもキツパリこう言い放った風香ねえに驚いてしまった。

「なんで！？いつもなら風香が真っ先に……」

「いつもならね！でも今回はヤバすぎるよ……」

「なによ！怖いわけ？」

「………こ……怖くなんかないもん！！でもさ……」

「あ……！！怖いんだ！！怖いから行きたくないんだ……！！」

……優実の悪い癖が始まった……

俺は頭を押さえた。……珍しく断った時はこう言うことで……風香ねえを挑発して仲間に引き入れるのだ。

例えば……そう……『黒板消し落としゃろうよ!』って誘われたときも、眠かった風香ねえは断ったのだが、優実の挑発で『分かったよ!ーやればいいんでしょ!ー上等じゃないの!』って言って……結局……黒板消しが命中した先生に風香ねえは叱られた……って事が、この間あつたな……。

「……怖くなんてない。でもさ……私たちがやっても邪魔になるだけだと思う。」

お母さんが見てたドラマでも、下手に入っていつて捜査を滅茶苦茶にしちゃうシーンがあつたもん。」

……風香ねえにしては珍しく正論だな……本当に行きたくないのだから……。

でも……そのせいで優実がプウ~~~~と膨れてしまった。

「何よ何よ!ーもう風香なんて知らない!ー!」

そう言つて自分の席に帰つてしまった。

……優実は怒ると怖い……

風香ねえと隣の席なのに、話そうとしなかった。

休み時間に風香ねえが話しかけても、必要最低限の話だけするとプイッと拒絶するかのようになり、風香ねえに背を向けたり……移動教室

の始まる前になると風香ねえと俺と優実で一緒に行くのに、さつさと俺だけ連れて優実が教室を出てしまった。……風香ねえが追いかけてくる気配はない……

「さてと……土郎と一緒に『捜査』するでしょ？」

当然でしょ？って顔で優実は言ってきた。

きつと……ここで断ったら俺は風香ねえと同じ仕打ちを彼女から受けるのだろうな……

でも、それを考えなくても、俺の答えは決まっていた。

「決まってるだろ？手伝うよ。」

そう言うと、ぱあーっつと笑顔になった優実。

「だよね！！あゝ怖がりな誰かさんとは違って本当に土郎はいいやつね！！」

じゃあ……帰りの会が終わったら、すぐに教室をでて私の家に行こ！あの人は足が速いけど積はいちばん端っこだから、追いつかれなように精一杯走ろうね！！」

笑顔でそういう優実……ちよつと風香ねえが悪く言われすぎのような気がするけど……風香ねえを説得するのは難しそうだから……『捜査』をしたいから、風香ねえは邪魔だな。

だって……クラスにも行方不明で休んでいる友達がいる。だから……俺は……その子を探したい!!

俺は優実の提案にうなづいた。

7話 捜査

「…………えつと…………次の角を左ね!!」

私…花里優実は土佐犬の次郎にまたがって夜の街を進んでいた。

本当は士郎とも一緒に『捜査』をしたかったのだが、自分たちの脚となってくれるもう一匹の土佐犬…ハナが士郎が乗ろうとすると暴れまくって、士郎に生命の危機が生じ始めたので仕方なしに自分だけで『捜査』に乗り出すことにしたのだ。

…冬木市で連日起こっている行方不明&殺人事件…

捜査1課の刑事である私の両親はその事件のせいで、ここ数日…姿を見ていない…………
電話をかけても出てくれない事が多い。

学校であった事とか風香や士郎と遊んだこととか話したいのに…………
本当に寂しくてたまらなかった。

だから、自分も協力して、早く事件を終わらせたい!!そう思って今回の『捜査』に踏み出したのだ。
ちゃんと『武装』もしてあるし、次郎もいるから安心だ!

だって、次郎は強いんだもん!!

私の大切な家族の次郎は、顔はイマイチだけど、おっそろしく強く
て、なんかの大会で優勝したくらいなんだから！！

で、そんな次郎と2人で私は『廃工場』に向かっていた。
まずは、怪しげなところを全て当たらないといけない。

学校での『聞き込み』だと、怪しいところは『霧の中から現れる森
の洋館』か『廃工場』……私が選んだところは『廃工場』だ。
その方が近いし……

「もう少しだよ、次郎……って……」

次郎が急に走るのを止めた。なんだろう……って思うと……

「ココから先に入っではいけないよ」

目の前に立っていたのは知らない蒼が似合う黒髪の青年にだった……

……

… 土郎に優実の向う所を聞きだして先回りした私。

… … … とは言っても、『風香』の姿で外を… … … しかも夜に出歩くのは危険なので、影分身を家に残して私自身は『変化』をして外に出た。

… … … 『影分身』に行かせた方が得策かもしれないが、万が一… … … 倉庫街にいた誰かに見つかって、戦闘になった時に、影分身で優実を守りきる自信がなかったからだ。

ちなみに、今の私は『滝隠れの里』の若き里長『シブキ』に変化している。

… … … 適当な人物がそれしか思いつかなかったのだから仕方ない。

「誰…？」

「答える筋合いはないね。」

だが…重ねて言うが、ココから先に入ってはいけない。」

目の前の優実突然現れた私に驚いているみたいだったが…すぐに気を取り直してきつい顔に戻った。

「私、廃工場に捜査しに行きたいの…！」

「ダメだ。こんな時間の子供の一人歩きは危険すぎる。」

廃工場に何かがあるかは知らないが、ハッキリ言って平時でも子供が一人で行くところではない。増してはこの異常事態だ。何が潜んでいるのか分からない。

「一人じゃないもん…！次郎がいるもん！」

「それは犬って言うんだよ…御嬢さん。」

だから帰りな。」

「いやだ…！私は調べないといけないんだ…！」

…デカい声だな…

この辺り一帯に響き渡るくらい大きな声で『嫌だ』と叫ぶ優実…

一応、私が風を操って声が『怪しげな廃工場』の方に行かない様にしているからいいモノの……

「えっと……いいかい？ だいたい君には力がないじゃないか。」

力づくで気絶させて、家に連れ帰ってもいいのだが……そんなことしても、どうせ優実の事だ。

明日も同じことを繰り返すだろう。

そうならないようにするには、今ここでしっかり言って返した方がいい。

「力が無い以上……ここから先の『捜査』は子供が首を突っ込んでいいことではない。

もし……君が私を倒すくらいの力があれば、話は別だが……」

優実がしゅん……となつてうなだれたように見えた。

よし……それでいい……

これで帰ってくれるはずだ。

「さあ……家まで送ろうか。」

ココに長居するのは、私だけでなく優実も危険だ。

いつ……何が起こるか分からないのだから……

私は彼女に触れることができるくらい近づいた。
……変化してある関係で、私の身長は彼女より高い。
だから視線を合わせるために、少しだけしゃがんだ。

「倒せるよ。」

「えっ?」

突然、…よつやく聞こえるくらいの声で、ぼそり…とつぶやいた優実……。
そして……

ドサツ!…!

優実の小さい身体が私にぶつかったとき…鋭い痛みが胸にはしった。
痛みのあまり地面に私は倒れてしまった。
何とか目を開けて…優実を捕えると……

がたがたと震える優実の手には銀色に光るナイフが握られていた。
先端からはポタリ…ポタリ…と赤い液体がしたたり落ちていた。
返り血を浴びた優実の顔は、青を通り越して真っ白だった。

「…わ…悪くないもん……私は…悪くないもん……
アナタが……倒したら…通っていいって言ったから……だから……

私は……私は……

行こう、次郎！……」

薄れゆく意識の中……走り去っていく優実と次郎。

「ま……待ちな……！！ぐっ！！！！」

手を伸ばそうとするが、激痛が走って動けない。

ボワン……と変化が解けた気がした。

ドク……ドクつと闇に生える深紅の色が服や接するアスファルトを染めていく……

……一応……とっさに心臓を外したけど……それでも致命的には変わらない。

こうなるんだったら、前世で医療忍術を学んでおけばよかった……

「……まさか……こんなところでお目にかかれるなんて……」

だれか……女の人の声が聞こえた。

かすんでいく視界がとらえたのは、長い髪を一つに行いた女性……

でも、問いただす気力はもうなく……

私の意識は闇に沈んでいった。

8話 あこがれの人

…目を開けると、そこに広がっていたのは見知らぬ天井…

私は見知らぬ殺風景な和室の布団に寝かされていた。

窓からは太陽の光が差し込んでいる……遠くで車が走る音が聞こえた。

「…っっ！！」

上半身だけでも起き上がろうとすると、腹部に痛みが走った。

……そうだ……私……優実に刺されて……

ん？でも……包帯が巻いてあるし……出血している感じもない……
いったいだれが……？

その時、ガラリつと障子が開いて、1人の女が姿を見せた。

歳は高校生くらい……だろうか？髪が長く後ろで一つにまとめている。
ほんのりと酩の匂いをさせた彼女は目が覚めている私を見ると、少し微笑んだ。

「ほう……もう動けるのかい。」

「あ……あの……私……」

「ほら、これ食べな。毒は入ってないから安心しなよ。」

少女が持っていた盆を私に渡してきた。

上に乗っかったのは、まだ湯気が立っている味噌汁だった。中に白米が入っている。

…他にもネギやら大根やらも混ぜられている。

「早く食べな。」

「あ…ありがとうございます。」

一礼してから味噌汁をすする。

…母親の作る味噌汁より美味い…

ほんのりと蟹の味がして、これだけで何杯でもいけるかもしれない。

「どうだ？私の店で出ている味噌汁だ…って言っても、残り物を温めた奴だけだね。」

「店？」

「ああ、私の家って寿司屋なんだよ。深山町の商店街の寿司屋。

私も夜は基本的に店の手伝いをしているのさ。」

そう笑って彼女は答えたが…急に真顔になった。

「…で、あんた…どこ出身だ？」

「え…？えっと…この町ですけど…」

「そうじゃなくて……前世だ前世。どこの里出身の忍かって聞いているんだ。」

……今この人…何て言ったんだ？

私が戸惑っていると、痺れを切らしたのか厳しい顔をしてドンっと床を叩いた。

「早くいいな！…！」

「……滝隠れの里の中忍…だ。」

「ほう……やはり『滝』か……！」

「やはり？なんでそう思ったんですか……ってか、アンタ何者だ！？」

「何者って言われても、アンタと同じ…前世が忍者だった者さ。なんでアンタが『滝』かと思ったか…か？簡単だ。あんたが滝の里長に『変化』してたからさ。」

「あそこの長は内気だからね……そう簡単に表に出てくる奴じゃない。」

彼女は、そう言うとペットボトルのお茶をグイッと飲み干した。

「で…忍者時代の名前は？」

「……ふう……！」

「ふう……『滝隠れの里の中忍・ふう』……か。」

私の名前は海原 柚木……前世の名前はユギト。

『雲隠れの二位ユギト』って言ったら結構名前が知られていたんだけど……！」

「二位…ユギト…って…！！！」

知っている！！

私と同じ…尾獣を体内に飼っていた人だ！！

噂で聞いたことがある……確か二歳の時に尾獣を封印されて、里の人たちに嫌われながらも実力で認めさせたって聞いたことがある。私の憧れの存在だった人だ！

「まあ…知っていても知らなくても今はどうでもいい。

にしても……アンタ……幻術が苦手でしょ？」

「な……なんでそれを…！！？」

「アンタを刺した子…幻術にかかってたんだよ。

おかしいと思わなかったのかい？

たかが七歳の子供が隠し持っていたナイフに気が付かないほど抜けているのかい、滝隠れの忍者は？」

「そ……そんなこと……！！！」

『ない』と言おうとしたが、口をつぐんでしまった。

言われてみたら確かにその通りだ。

いくら優実に対する警戒心がなかったとはいえ……気が付かないなんておかしい。

だって私は一人前の忍者…中忍だぞ？

前線から遠のいていたとはいえ、そのくらい気が付くに決まっっている。

幻術で認識を阻害されていた……ってこと？

だからナイフに気が付かなかった……

そういえば……

「……なんで……優実はあるに力があつたんだ？」

なんで優実私の気を失わせるくらいの怪我を負わせることが出来たんだ？

だって…彼女は七歳だ。

しかも女の子……激怒しているからとはいえ、相手の致命傷になるくらいの傷を負わせる力なんて持っているわけがない。

ましては今は冬……私は結構厚着をしていた。

コートやらセーターやらを貫通させて肌にナイフがたどり着くだけでも一苦労なのに……

「まさか……優実も……」

「それはないな。」

断定したユギトさん。

まっすぐ真剣なまなざしで私を見てきた。

「アンタに応急処置レベルだが、医療忍術を施した後、分身にアンタを任せ、私はあの子の後を追った。」

……で、彼女は廃工場の中で人格が変貌した。

赤い短髪の女と向かい合っていた時にはすでに彼女は人ではなかつ

た。」

「人では…なかった？」

人ではなかった？どういう意味だ？

ユギトさんはうなづいた。

「『呪印』というものを知っているか？」

確か聞いたことがある……気がする。

何という名前だったか忘れたが……どこぞの抜け忍が開発した禁術で、それを施されると強靱な力が得られる……反面、副作用で死に至ることもあるのだとか……

「噂程度なら……でも……それがなんで……？」

「私も噂程度でしか知らないが……アレに似ていたな。」

彼女が、赤髪の女の所に来た時にはすでに異形とかがしていた。肌は黒くなり、黒めが黄色に変化していて、角が生え……般若のような顔をしていた。

あのままだったら……赤髪の女は死んでいたかもしれないが……

だが……私が介入する前に終わったよ。」

「終わった……って？」

「……」

激痛に結局耐えられなかったのだらうな。」

ユギトさんは目を細めた。

「いつ彼女に呪印が施されたのかは分からない。だが……あれは私が知る限りの『呪印』の特徴と一致していた。」
「でも……呪印って施されるときにも激痛が走るって聞いたことがあります!!」
たしかに優実ちゃんは気が強かったけど……七歳の子供が耐えられるとは……」
「それは彼女が『忍者』だったらの話だ。

実は……幸いなことに赤い髪の女は簡単に幻術にかかってくれた。だから優実……といったか？彼女の遺体は私が回収することが出来た。

そこで調べてみて分かったのだが……

彼女には経絡系はなかった……が、代わりに存在した似たような回路がズタズタになっていた。

おそらく……そこに『呪印』の力が働いたのだろうか……

似たようなものだが別物だ……その分……効力が発揮されるまでに時間がかかったのだろう。

おそらく……その能力が効きはじめた時に、アンタと出会い……呪印が発動した。

見なかったか？彼女の身体に不思議な刺青が刻まれ始めていたのを……」

私は黙って……あの時のことを思い出そうとした。

そういえば……言われてみたら、あの時の優実の腕……になにか黒い斑点のようなものが現れていたような……

「でも……一体誰が……呪印とか幻術とか使って一体何を……」
「そこまでは私も分からないさ。」
「まあ……軽率な行動は慎むように！」

そう言っつてユギトさんは私の頭をポンポンと叩いた。

「……さてと……」

「じゃあアンタの家と優実つて子の家……教えてくれる？」

「……なんで？」

「そりゃあ決まってるだろ！」

「あんた……こんな時期に無断外泊したんだからな！」

「私が言い訳を考えてあげたから、それを親御さんに説明しに行くのさ。」

あとは……」

……
「そう言っつと押入れから何かを取り出したユギトさん。」

「とつても大きなリュックサクだった。まるで私一人入るくらいの」

……

「ま……まさか……でも、優実つてバラバラにしたんじゃ……」

「誰が死にかけのアンタの傷を治したと思ってるの？」

「バラバラにしたとしても、多少なら原型に戻せるくらいの技量は持つてるんだから。」

「……このまま行方不明っていうより、こうした方が……この子の親御さんのためにもなるだろ？」

何年も帰って来るはずのない娘を待つより……こうした方がいい。」

ユギトさんは無表情だったが……声が少し震えていた。

「……あ……そうだ……」

カレンダーを見たユギトさんが何か思い出したみたいな声を上げた。そしてすまなそうに私を見た。

「悪い！アンタを家に連れて帰る前に、寄るところが出来た！！先にそっちに行つていいか？」

「別にかまいませんけど……どこに行くんですか？」

「死んだ兄貴の友人の奴が実家に帰ってきているみたいだからこの間会いに行つたんだ。」

そしたら死にかけてね……飯もろくに食べていないみたいだったから、3日に1回は、さっきフウに飲ませたのと同じ味噌汁とかを差し入れに行つてるのさ。」

「へえ……」

この人……意外と世話好きなのかもしれないな……
だから私を助けてくれたのかもしれない。

「別にかまいませんよ。」

「よかった。つき合わせて悪いな……あっ！そうそう……」

あなた……私が『いい』っていうまでは別人に変化してな。

なんかアイツさあ……ヤバいことに首ツッコんでいるみたいだしね。私は何とかするけどアンタは何とかできなそうだしさ。」

「わ……私だって……ヤバいことになったら何とか……しますよ!!」

「へえ……ならなんで、あんな目立つマネをしたのか聞きたいね。」

まあ……『前世の記憶』って奴は七歳児じゃ実感わかないし、『精神が身体に引きずられて』ってこともあるから仕方ないかもしれないけどね。」

そう言っただけで意味ありげに笑うユギトさん……

まさか……

「もしかして……あの時倉庫街に……?」

「『口寄せの術』で猫を呼び出してね。」

今から行く知り合いが『ヤバいこと』に首ツッコんでいるみたいだからさあ……だけど何をするのか具体的に分からないとなったら、私も気になってきてね……。

だから『口寄せの術』で通常サイズのネコを何匹か召喚して見回らせてたのだ。」

夜は私自身も変化をして見回りをしているけどね。」

気が付かなかった……まさかアレを目撃してたなんて……

今思えば幼稚な行動だったと思う……ああ!! 思い出すだけで顔が赤くなる!!

「…失敗は誰にでもあるさ。

一応、なんとかごまかせたみたいだしね。

まあ……万が一のために、変化をやってること。ごまかしきれない人もいるだろうしね。

ほら、行くよ！！」

またポンポンと私の頭をなでるように叩いたユギトさん。

そのまま障子を開けて外に出て行った。

私は一歩遅れて彼女の背中を追いかけた。

8話 あこがれの人（後書き）

ユギトさんが死んだのは、フウより後ですが、転生する時に生じたタイムラグで、ユギトさんの方が先に転生しています。

9話 死にかけの男

……冬木市の西側…開発真っ最中の新都とは逆に、古くからの町並みを残す『深山町』…

そこにある人気デートスポット…海を臨む海浜公園…そのベンチに目的の男は座っていた。

……大半の人が『幸せの絶頂!!』って感じで過ごしている海浜公園では、彼は異質のオーラをだしていたが、誰も気に留めない。

フードを深くかぶったその男の顔は、下を向いているので見えない……。

よれよれの黒いパーカーを着て疲れたようにただただ下を向いていた。

その人に向かってズカズカと進んでいくユギトさん。

すると彼女の存在に気が付いたのか、男は顔を少しだけあげた。

「まったく……なんで柚木^{ユキ}ちゃんは俺の居場所が分かるんだ？」

柚木？……ああ……ユギトさんの今世の名前か……

そりゃ……『口寄せの術』で呼び出したネコが教えてくれたからだけど……でも、そんなこと言えるはずもない。

「雁夜^{アンダ}の居そうなところくらい簡単に想像が出来る。」

ほら、さっさと食べな。」

そう言つてユギトさんは、よく出前とかで使いそうな銀色の箱の中から味噌汁を取り出し、彼に渡した。彼はためらいながらも受け取った。

「俺なんかこんなに気を使わなくてもいいのに……」

「馬鹿！！アンタは兄貴の友人だろ。私とだって遊んでくれたことあつたし……」

それに、死にそんな奴を見過ごすなんて私には出来ないからな。」

……これを真顔で言つて見せるユギトさんつて凄いと思う。

フツーさ、男の人にそんなセリフ言う時つて赤面しない？恥ずかしくないんですか？

男の人は完全に顔を上げた。

……上目づかいでユギトさんを見上げるその人は……白髪で……左目が濁つたような感じの黄色で……傷みたいな痕もあつた。

だけど……生気を感じさせない外見だつたけど……不思議と『怖い』とは思わなかつた。

なんでだろうか？

「柚木ちゃんは優しいな。」

「……何度も言つているが、当たり前のことをしてるだけだ。さっさと食べな。あんた……ろくなもの食べてないだろ？」

彼は何も答えなかった。
ただ……静かにゆっくりと、味噌汁を飲み干した。
そして優しい笑みを浮かべながら……でも、どこか厳しい顔つきで椀を返した。

「ありがとう……でも、もう次はいいよ。」
「何言ってるんだい。本当は都合がつかぬなら毎日届けたいくらいだ。まったく……いい歳した大人が子供に養ってもらっんじゃないよ。」
「ははは……まったくだな……」

自嘲気味に笑う彼……

「でも、本当にいいんだ。
……もう俺は長くない。もって一か月だ。
それに……何度も言っているけど、俺は今……」
「危ないことにかかわってんだろ？
知ってるよ。だが……何度言われても、半死人を見捨てるわけにはいかないな。」
「だが……？その人は？」

ようやく私の存在に気が付いたか！！
あ……ちなみに、私の今の格好は『変化の術』で大学生くらいの女の子に変化している。

「ああ…こいつは店のアルバイトの新人姉ちゃんだ。

紹介するよ。こいつは死んだ兄貴の友人の『間桐雁夜』っていうんだ。」

「間桐さん…ですね。

はじめまして。柚木ちゃんのお父さんの店でバイトをしています…
フウって言います。」

ココまで言い終えて、雁夜さんと目が合ったとき……突如、ゾクゾクつと悪寒が走った。

何だ……この感じ……

気持ち悪い……なんか…喉の奥から何かがこみ上げてくる……

そくだ……この感じは……前世で『七尾』の制御が出来なかったときによく似ている!!

もっと強くなつて、里の奴らを見返してやりたくて……

たしか……『七尾』を完全に支配下に置こうと修行してた時……あの強大すぎる力に太刀打ちできなくて…制御が出来なくなつたんだ。幸いにも忍袋の中に入っていた『兵糧丸』を飲んでチャクラを上げること、何とか抑え込んだんだ。

…でも、私の中にもうアレはいないはずなのに……

「ちよ…フウ!?大丈夫かい?顔色…真っ青だよ!？」

ユギトさんが私の背中をさすってくれている。
私は曖昧に笑った。

「へ…平気です…すみません…見苦しいところを…」

「まったく…調子悪いんだつたら早くいいなって!!」

……ってか…雁夜も体調が悪化してないか!？」

見てみると、痛みをこらえるような姿勢をしている雁夜さん…顔からは汗がにじみ出していた。

「あ…ああ…大丈夫…だ…」

「そうは見えないぞ!!」

「まったく…強情張りが増えたな…まあ…遅くなるから私たちは、もう行くけど…」

「アンタもムリすんじゃないぞ」

「ああ…分かってる…」

ユギトさんがその場から去っていくので、私は慌てて一礼をして、ユギトさんの背中を追った。

「……で、一体どうしたんだい?」

ずっと黙ったまま歩いてたが、公園から離れて…新都へと渡る真つ赤な橋…『冬木大橋』の中ごろに差し掛かった時、ようやくユギトさんは口を開いた。

「……雁夜さんと…目を合わせた時に…前世で私の中に封印されていた『化け物』の制御が出来なくなった時みたいな感じがしたんです。」

そう言うと、ユギトさんは驚いたように眼を見開くと立ち止った。

「私はそんなことなかったぞ？」

確かに……『砂漠の我愛羅』みたいに、封印が解けたとしても尾獣の能力が忍に残るってことがあるし…

実際に、私にはまだ封印されていた『二尾』の残留チャクラがあるしな……」

「残留チャクラ？」

考え込むユギトさんに尋ねる。

「ああ…『尾獣』ってのは巨大なチャクラの塊だ。

だから封印しようとしても残留するチャクラがあるのさ。ほら、コップ一杯に入れてある水を別の容器に移したら、コップに少しだけ水滴が残るだろ？アレと同じさ。」

「じゃあ……封印される回数を重ねれば重ねるほど…尾獣は弱くなっっていくってこと？」

「いや……だいたい残留って言っても、奴らにとってはほんのわずかな部分さ。
だからそんな量……すぐに回復してしまうから、弱体化なんてしないよ。」

でも……妙だな……なんでアンタだけ……？」

再び考え込むユギトさん……。

結局、答えが出ないまま目的地に着いてしまった。

えっと……先に行っておくけど、ちゃんと今は『風香』の姿に戻っています。

さっきの裏路地で、誰にも見られていないのを『探査』まで使ったちゃんと確認してから戻った。

…玄関を開けて私を見た瞬間、母親は激怒するか……と思ったら、いきなり抱きしめられたので驚いてしまった。

「風香の馬鹿!!どこ行っていたの!!」

って泣きながら言う母親……荒々しい言葉とは裏腹に……そこには『私を心配してくれていた』という暖かなモノで溢れていた。……前世では……こんなことはなかった。

「う……ごめんなさい……」

自然と目の前がかすんでくる。母親のぬくもりが私にもしみこんできて……なんでだろう？とつても暖かくて……暖かくて……

「おっ？泣いてんじゃん！！」

「な……泣いてなんか……ない！……！」

思いつきりユギトさんをにらみつけた。母親もユギトさんに気が付いて、私を抱きしめたままユギトさんの方を向いた。

「あの……」

「ん？ああ……その子さあ……私の家の前で寝てたから、起きるまで保護してました。

本当は電話をかけた方が良かったと思うのですが……この子……電話番号知らなかったみたいで……

それで送ってきました。」

「そうですか。本当にありがとうございます……！」

でも…なんで……」

「じゅめんなさい……」

ゆ…優実ちゃんが…一人で『捜査』に行くって……で、止めようと思っ
て外に出ただけ……どこに行ったのか分からなくて……

で…気が付いたら疲れて柚木さんの家の前で寝ちゃったみたい……」
「そうか……」

そういうと、優しく私の頭をなでる母親……

「娘がご迷惑をかけました…本当になんとお礼を言ったらいいのか
……」

「いえいえ…気にしないでくださいよ。」

当然のことをやっただめです……じゃあな、フウちゃん。
これからは『危ないこと』に首を突っ込むんじゃないぞ。アンタは
まだ『子供』なんだから」

「ゆ…ユ…柚木さんだって…子供じゃないですか!!」

「私はアンタより大人だよ。」

そう言っ
てユギトさんは私に背を向けた。

…なんか……もっとユギトさんと話したかったな……

そう思っていると、ユギトさんが急に振り返って笑いながらこう言
ったのだ。

「んじゃあな、フウちゃん。また来てもいいぞ。」

「は…はい……」

心の中の暖かいモノがこれ以上ないってくらい膨れ上がった。
ユギトさんの背中が遠ざかっていく……

「あなた… 柚木さんって人に何かしてもらった？ …… その… 家に送ってきてもらう以外に？」

「え… っと… お店の味噌汁食べさせてくれた…！」
「お店の味噌汁？」

「うん！ 柚木さんの家ってお寿司屋さんなんだよ…！」

「へえ… じゃあ、今度お礼に食べにいこっか？」

「やった…！…！」

……ちなみに……

このあと、母親は、私と… それから学校から帰った士郎に『電話番号』を教えてくれた。

士郎は『なんでさ？ なんで急にいなくなっちゃったんだよ？』って言われたので『だって… 私は忍者だから』っていつておいた。……もちろん士郎は信じてなかったみたいで、納得がいかない顔をしていたし、なんども問いただされたけど、はぐらかしてしまった。

……でも…… 一番うれしかったのは父親が仕事から帰って来た時だ。

もちろん…… こっぴどく怒られたのだが…… 私は嬉しくて… 泣いてしまった。

あ……これは私がMだからってわけじゃないぞ。

……真剣に怒ってくれる父親が……私のために怒ってくれるという
とが嬉しかったんだ。

だって……前世の私にそんな人はいなかったから……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1415z/>

風が紡ぐ聖杯戦争

2011年12月16日00時46分発行